

最優秀賞（国土交通大臣賞）

作文の部 中学生

『大雨による土砂災害をうけて』

山口大学教育学部附属山口中学校
二年生 森本 優

今年もまた、雨の季節がやってきた。去年の悪夢のような大雨と、それによる土砂災害を思い出すと今でもぞっとする。去年の災害は本当にひどかった。

僕の住む地域は佐波川をはさんで二本の県道がはしり、その外側に山がそびえ立っている。ふだんは風光明媚で住みやすいところだけれど、ひとたび大雨が降ると、川の氾濫と土砂災害の危険にさらされることになる。静かで住みやすい所なので、老人ホームや保育園も山の斜面に建っている。山の斜面にも、たくさんの家がある。去年の土砂災害の爪痕は色濃く残り、むき出しになっている山肌からは、今にも岩がころがり落ちてきそうだ。砂防ダムも建設中だが、まだまだ完成には程遠く今大雨が降ると危険な状況だ。

今までにも何度か大雨が降ることはあったけど、祖父母達に聞いても、

「こんな大雨の降り方は今までになかったし、まさかこの山がくずれるなんて思ってもみなかった。」
と言っていた。

この地域は、前にも言ったように、山と川にはさまれている。今年の災害の時、早目に道路がふうさされたおかげで、被害もでなかったけど、あまり閉ざしすぎると、迂回路もなくなってしまふ。それどころか、孤立してしまうと緊急車両すら通れなくなってしまうのだ。たしかに閉鎖することも大切だろう。しかし、救援物資すらとどかない状況になりかねないことは、できるだけ早く解決しなければならない問題だと思う。

ひなん場所も、ぼくらの地域は必ずしも安全とはいえない。小学校は、川にかこまれ、低い所にある。しかし中学校も斜面に建っており、山がくずれた場合、まきこまれる可能性がある。去年の大雨のとき、土砂が公民館の中にまで入りこんでいたので、公民館すら安全とはいえないのである。

まだ問題点はある。ぼくの住んでいる地域は水道が無いのだ。だから、井戸水をポンプでくみ上げてつかっている。あの大雨のあと、くみ上げた水がにごって、のめない地域もあった。にごってのめない水が出るのも、とてもこまっていたとき。

しかし、人は「のどもと過ぎれば熱さを忘れる」というようにこの大雨による土砂災害も忘れてしまうだろう。それでもこの災害は、忘れてはいけないと思う。「天災は忘れたころにやってくる」ともいうので、気をゆるめず、しっかり災害対策するのがいいと思う。まず、しなければならないのは、なぜこのような災害が起こってしまったのか、原因を考えることだと思う。ぼくが考える原因は2つある。地球温暖化の影響と、山の手入れがされていなかったという点だ。まず地球温暖化の影響だが、温暖化すれば空気が膨張する。これにより、大量の水分が空気中にふくまれて大量の雨が降る。山の手入れがないというのは、木や草が山の斜面を支えていたが、手を加えずにいたので、くずれやすくなっていた。これを教訓にして、対策をねったほうがいいと思う。まず、まっさきにとるべき行動は、くずれた砂防ダムを修理して、土砂をとり除くことだ。いまでも土砂のあるところを片付けなければならない。しかし、個人の力ではどうにもならないので役所にしてもらいたい。まだしなければならないことはある。たとえば、川の中の土砂をとりのぞくことだ。たいしたことには思えないかもしれないが、川の中の土砂で水が増してしまいもっとひどい土砂を含んだ水が流れてこないともかぎらないからだ。しかし個人では小さな川ぐらいしかできないので役所にたよるしかない。ほかにも、橋がくずれないように点検することも、大事だと思う。

だからといってハード面だけ強化しても何の意味もない。人々の心がけもとても重要だと僕は思う。いくらい環境であっても、逃げられなければ全く意味がないことだからだ。地域住民がいかに避難するのか、考えることもとても重要だと思う。一人も犠牲者を出さずに避難するには、やはり思いやりの心が必要不可欠であると思う。お年寄りや体の不自由な人に気がくばれることは、すなわち地域の安全につながるからだ。災害に対処するためには地域での連携の必要がある。常日ごろから地域の人との交流を活発にし、親しくしておくことが災害に対して最も効果的な方法だと思う。これからも、地域の交流をしっかりとしていきたい。